

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUJIBAKU

2023.8 No.117

トピックス

- ・第127回・128回文化財めぐり

資料紹介

- ・永礼孝二の木版画—版木からみた制作過程—
小郷 利幸

お知らせ

- ・「彫無季—彫書とその世界—」開催
- ・「歴史学者山本博文先生の仕事」開催
- ・「ノスタルジア—少し昔の津山—」開催



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(彫無季 彫書「聖哲」)

第127回文化財めぐり～西吉田・金井地区の文化財をめぐる～

○大崎公民館～光伯地蔵・夜泣き地蔵～吉田神社～西吉田1号墳～吉田陣屋跡～一貫東1号墳～大崎神社～根の山古墳～福力荒神社～○大崎公民館（参加者10名）

令和5年3月18日（土）の朝は小雨が降っていましたが、開始時間になると天気も回復し、津山市内西吉田・金井地区を中心にめぐりました。今回のコースには3箇所小高い場所があり、1箇所目は吉田神社と西吉田1号墳の所で、西吉田1号墳は住宅団地造成の際に保存された円墳で、墓地の中にあつて少しわかりにくいですが、よく見ると不自然な高まりで、盛土の古墳であることに気づきます。2箇所目は一貫東1号墳で、これも中核工業団地造成の際に保存された全長30mの前方後円墳です。墳丘にはキツネなど小動物の巣穴がたくさんあり、盛土であることがわかります。3箇所目は根の山古墳で、最後だったので皆さんかなり疲れて足が重たいようでした。この古墳は帆立貝の形をしたもののようで、鏡などがかつて出土していて、墓地の中に小規模な円墳数基と一緒にありました。これら古墳は、いずれも見晴らしの良い丘陵上にあり、現在も付近が墓地になっている所が多いようです。そのほか大崎神社、旧正月には大祭で賑わう福力荒神社などをめぐり、約5km程の行程を無事に終了しました。



文化財めぐり風景（夜泣き地蔵）

第128回文化財めぐり～榑地区の文化財をめぐる～

○成名公民館～榑船着場跡の常夜灯～大日如来・道標～茶屋林道標～甲田池窯跡～五反田古墳群（消滅）～十寸鏡神社～稲荷大明神～○成名公民館（参加者7名）

令和5年5月13日（土）は午後から雨という予報でしたが、なんとか傘を使用せずに津山市榑地区の文化財をめぐることができました。

今回は因幡道の一部をめぐるルートで、最初の榑船着場跡は加茂川にあった高瀬舟の船着場で、当時の高灯籠型の常夜灯が残っていて、市指定の史跡です。そこから東に進み峠にあるのが、茶屋林道標で宝暦4（1754）年に分かれ道に建てられたものです。現在はこの因幡道に平行して国道53号線が通っているので、因幡道を通る車は少ないようです。そのほか周辺にある甲田池窯跡（須恵器の窯跡で詳細は不明）、五反田古墳群（6世紀前半頃の円墳で調査後消滅）のあたりを通り、十寸鏡（ますかがみ）神社は本殿が棟持柱のある市内でもめずらしい神明造です。最後に稲荷大明神を見学して、約5km程の行程を無事に終了しました。



文化財めぐり風景（榑船着場跡の常夜灯）

永礼孝二の木版画

版木からみた制作過程

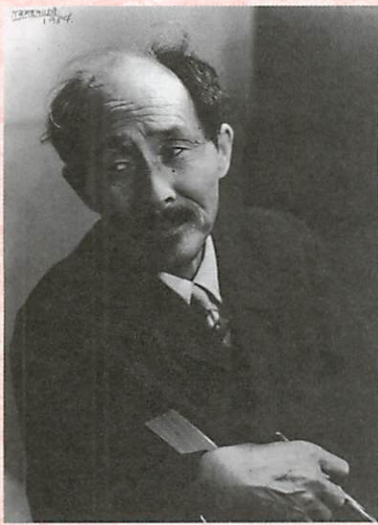
小郷利幸

はじめに

永礼孝二（1901～1975、写真①）は、津山市出身の版画家で、これまで平成17（2005）年に『没後三十周年記念永礼孝二展』、令和4（2022）年に『永礼孝二・日下賢二の木版画展』などを当館にて開催してきました。その際に版木についても一部紹介しておりますが、当館にも数点しか収蔵されていませんでした。

令和4年度に版木など147点にのぼる資料の寄贈があり、今回その中の版木から版画の制作過程の一端について、少しでも紹介できればと思います。

永礼は、明治34（1901）年、苫田郡東苦田村（現津山市志戸部）の生まれで、大正8（1919）年に上京し、岡田三郎助の本郷洋画研究所で学び、洋画を最初は



写真① 永礼孝二（個人蔵、写真提供：勝央美術文学館）

志しますが、その後彫刻家石井鶴三に指導を受け版画の世界にはいります。昭和7（1932）年日本版画協会の第2回日本版画協会展に初出品、その後もほぼ毎年出品を続け、昭和20（1945）年に津山に疎開した後も、地元で作品を制作し続けます。また、昭和27（1952）年には棟方志功らが設立した日本版画院の第1回展にも出品するなど、昭和50（1975）年に亡くなるまで作品を制作し、昭和48（1973）年には米国シンシナティ州立美術館日本画部門に「雪景色」が永久コレクションとして収蔵されます。地元の山間部や日本海などの雪景色や農村風景などをモチーフにした版画が特徴的です。なお、以前に紹介した日下賢二（1936～2020）は、永礼と同郷の版画家で、永礼に指導を受け、その後は抽象的な版画の世界へと進みます（註1）。

作品介绍

今回、版木を整理してみて、1枚の版画で版木の数は最大で5枚、多くは3枚ないし4枚であることがわかりました。その中で版木が全部そろっているもので、実際の版画と照らし合わせられる作品をさがすと

「桃等」（註2）という作品がありましたので、今回これを紹介します。

版画「桃等」（写真②～⑧）

昭和42（1967）年に制作された版画（写真②）で、永礼が66歳の時の作品です。机の上にテーブルクロスがあり、その上に桃が2個はいった透明な器などが置かれ、その右側に鯨の置物（註3）、左側に猿の置物（註4）や花瓶がならべられ、それらの陰影も表現され、背景もふすま柄のような縦縞や植物の葉などをあしらった絵柄で、右下には「永刀」のサインがあります。

今回紹介する版木は3枚（写真③～⑧）あり、それぞれに作品名と制作日（昭和42.8.22日刻）、三ノ一から三ノ三などと書かれていて、三ノ一の裏が三ノ三、三ノ二の裏は違う「秋の東浜風景四ノ一」という作品です。版木自体の大きさは三ノ一・三が縦43.5cm、横48cm、三ノ二が縦39.2cm、横47.4cmで、三ノ二は三ノ一よりは少し縦が小さめです。実際の作品は縦37.2cm、横45.7cmです。版木と作品は左右反対になるので、版木の写真を反転したのも合わせて載せていますので、そちらも見てください。

三ノ一(写真③④)は、全体にあるオレンジの着色部分は、彫り込まれた部分で、これら以外のテーブル上の黒や灰色部分、桃の器の外側灰色、桃の一部と隙間部分、テーブルクロスの細い縦縞の一部、鯨の置物の背中や猿の置物の体や顔の赤い部分、花瓶の左側、背景中央の縦縞、左右の隙間などが着色部分です。右下角に「逆し」の紙を合わせる際の印があります。

三ノ二(同⑤⑥)は、色が付いている所で、テーブルクロス、桃の器、桃の赤い部分、花瓶の左右、背景の右側の絵柄全般と葉のようなもの、左の植物の葉などです。右下角に「逆し」、左下角には対応する「一」印があります。

三ノ三(同⑦⑧)も色が付いている所で、テーブルクロスの緑色ストライプ模様、桃の器、桃の黄色、鯨の置物の一部、花瓶の全般、背景の中央や左側全般などです。右下角と左下角に同様な印があります。

この版木3枚をよく見ると、例えば鯨の置物と後ろの背景の関係で言えば、三ノ一の黄色い鯨の潮吹き部分は、切り合い関係から最後のようで、桃と器の隙間の黒い部分や花瓶の口部分も同様と思われます。このためこの版画は三ノ一が最後で、基本は三ノ三から三ノ一の順番に刷られたものと思われる。また、これら版木には版画にあるサインはありません(版木の中にはサインも一緒に彫られているものもあります)

ので、サインは別刷りのようです。

おわりに

今回の版木の整理から、版木は最大で5枚、多くは3・4枚で制作され、さらに1枚の板の裏表を有効に使用していました。また、今回の場合は三ノ一からではなく、三ノ三から順番に刷っている事もわかりました。これと同じような類例が、本館所蔵版画・版木の「小諸城跡」(写真⑨⑩)でも確認できます。これは昭和45(1970)年の作品で、版木は4枚あり、4-1(写真⑩)と4-2(写真⑪)、4-3(写真⑫)と4-4(写真⑬)が表裏です。版画(写真⑨)は小諸城跡(長野県小諸市)の石垣や木々の背景に噴煙が立ち上る山(浅間山)があり、左下に「永刀」のサインがあります。

これら4枚の版木をよく見ると、4-4の背景の山などが最初に、4-1の石垣や木などの輪郭が最後に刷られたと思われます。また、4枚の版木右下角と左下角に、同様な紙を合わせる印があります。

このように三ノ三(4-4)から三ノ一(4-1)の順番に刷る作業は、ある程度普遍的な制作工程なのかもしれません。ただ、いずれにしても実際の作業を見れば、版木を複数枚制作することはもちろん、3・4回刷り合わせて細かな色彩を表現していることから、かなり高度の技術が必要であったと考えられます。

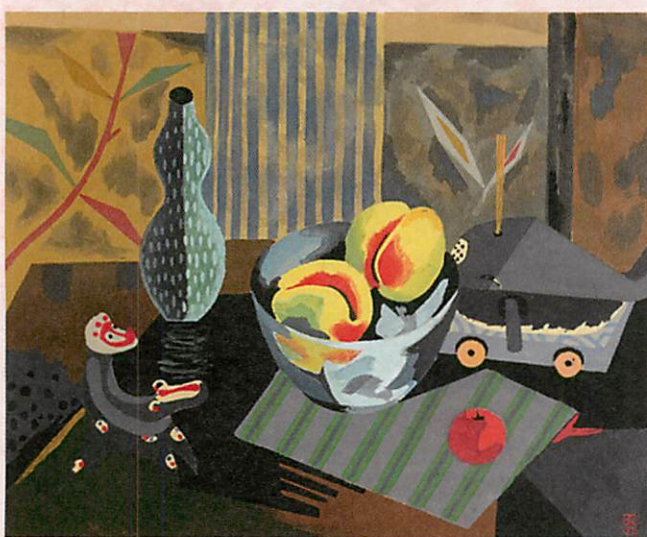
今回紹介できたのは、いただいた資料の一部のみです。今後も新たなことがわかれば、紹介できればと考えています。

なお、資料の整理は本館の小林泰子がおこない、資料紹介するにあたり、以下の文献を参考にさせていただきました。

また、写真①②(個人蔵)及び③から⑬(当館蔵)の使用に際しては、著作権者(ご遺族)の承諾の元、①②については、勝央美術文学館から写真データの提供を受けました。

註

(1) 小郷利幸2021「日下賢二の木版画」『津博No.110』津山郷土博物館



写真② 桃等 (個人蔵、写真提供：勝央美術文学館)



写真④ 版木 三ノ一 (反転)



写真③ 版木 三ノ一



写真⑥ 版木 三ノ二 (反転)



写真⑥ 版木 三ノ二



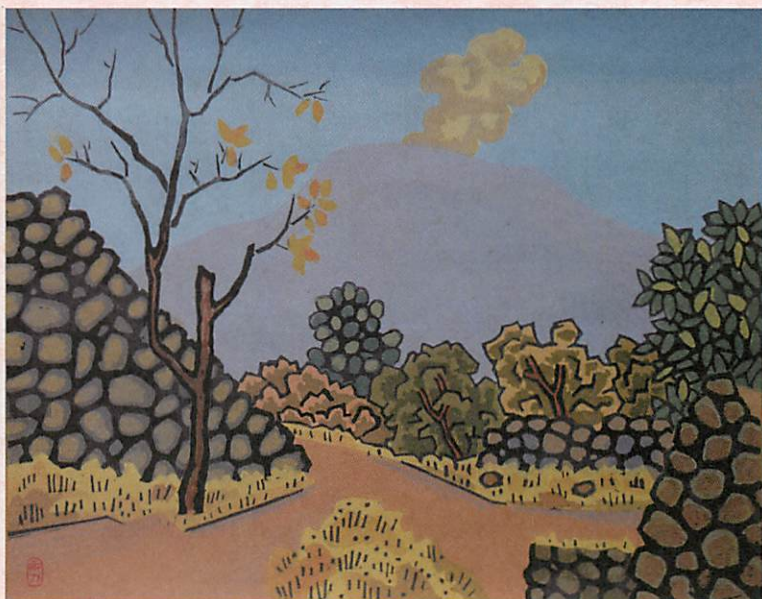
写真⑧ 版木 三ノ三 (反転)



写真⑦ 版木 三ノ三

(2) 『没後三十年記念永礼孝二展』の図録では、「桃の静物」という作品名。
 (3) 長崎県長崎市の長崎くんちの山車の郷土玩具「鯨の潮吹き」と思われます。
 (4) 熊本県玉名郡玉東町の郷土玩具「木葉猿」の「馬乗り猿」で子孫繁栄などのお守りと思われます。

(参考文献)
 没後三十年記念永礼孝二展実行委員会2000
 5 『没後三十年記念永礼孝二展』勝央美術文学館



写真⑨ 小諸城跡 (昭和45年)



写真⑪ 版木 4-2



写真⑩ 版木 4-1



写真⑬ 版木 4-4



写真⑫ 版木 4-3

「彫無季—彫書とその世界—」展を開催中です。

令和5年8月5日（土）～9月18日（月）まで、「彫無季—彫書とその世界—」展を開催しています。彫無季は津山市出身で彫刻と書を融合した、彫書を提唱した人で、彼の彫書や書など25点あまりを展示しています。没後30年経っても色あせない、古典的で前衛的でもある独特な作品をご堪能ください。



彫書「蘭風」

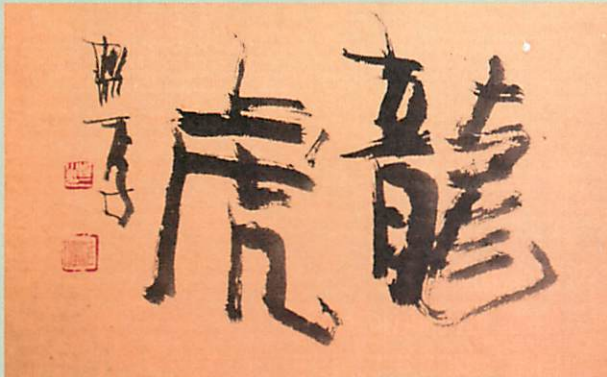
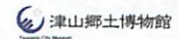


津山郷土博物館ミニ企画展
ちようむき

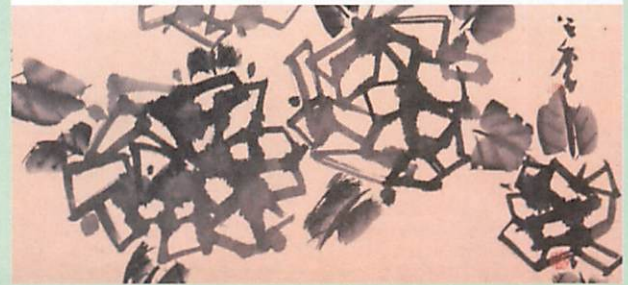
彫無季 彫書とその世界

令和5年 8月 5日（土）～ 9月18日（月）

津山郷土博物館 3階展示室の一部



書「龍虎」



「歴史学者山本博文先生の仕事」展を開催します。

令和5年9月23日（土）～10月29日（日）まで、「歴史学者山本博文先生の仕事」展を開催します。津山市出身で、東京大学大学院教授、同大学史料編纂所教授であった山本博文先生が、令和2年3月に63歳でご急逝されました。日本近世史を専門として、歴史は史料によって作られ、それを解釈するのが歴史家という信念の元、多くの史料を丹念に読み、それらに解釈を加えられ、その成果を多くの書物などを通して語られ、歴史学の普及はもちろん、歴史の面白さについてわれわれにわかりやすく語りかけてこられたと思います。

このたび先生のお人柄を偲び、その業績についてご紹介する企画展を開催いたします。

令和5年度津山郷土博物館特別展

ノスタルジア
—少し昔の津山—

津山市街はいにしへの世から美作の中心として栄え、その時々によって風景は変化してきました。本展覧会では、概ね大正時代から昭和40年代の写真を展示して、移り変わり行く津山の姿をご紹介します。

会 期：令和5年11月4日(土)～12月17日(日)
 会 場：津山郷土博物館 3階展示室
 休 館 日：毎週月曜日、祝日の翌日、その他
 展示内容：「移り変わる津山」、「川の情景」、「津山の橋」、
 等のテーマ別に写真約70点を展示します。

記念講演会
 演題：近代津山の産業
 日時：令和5年12月9日(土) 13:30～15:00
 会場：津山圏域雇用労働センター
 講師：岡山地方史研究会会員 日下 隆春氏
 定員：80名(申込不要)



博物館だより「つはく」
No.117 令和5年8月31日

津博
TSUYAKU

【編集・発行】津山郷土博物館
 〒708-0022 岡山県津山市山下92
 Tel (0868) 22-4567
 Fax (0868) 23-9874
 E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp

【印 刷】二 葉

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00
 【休 館 日】毎週月曜日・祝日の翌日
 年末年始(12月29日～1月3日)・その他
 【入 館 料】一般…300円
 (30人以上の団体の場合240円)
 高校・大学生…200円
 (30人以上の団体の場合160円)
 65歳以上…200円
 (30人以上の団体の場合160円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です